



「1000mって、どれくらい?」「学校からどこまで行ったら1000mになるの?」

3年生の算数の学習で、そんな声が上がりました。地図や教科書の中の数字ではなく、自分の体で「1000m」を確かめてみようと、距離計測器を手に校外へ出て、子供たちは実際に歩いてみることにしました。

今回の学習のねらいは、「1000mという長さを、数値としてだけでなく、実感としてとらえること」。教室では、まず

地図や写真をもとに「この辺りが1000mだと思う」とそれぞれ予想を立てました。

そして、いよいよ実証の日!私も同行しました。

校門から出発すると、先生が手にした距離計測器の数値に目を凝らしながら、歩みを進めていきます。「まだ200m?そんなに?」という驚き、「この坂で400m越えたよ!」という歓声。しかし、「目指すは1000mのゴール」です。子供たちの学びは「点」では終わらず、「線」になってつながっていきます。

そして、先頭に立って計測する先生と、後方でワークシートを見ながら進行を確認する子供たち。自然と先生との役割分担が生まれ、声を掛け合いながら歩く姿には、協働的な学びの空気が満ちています。先生と子供たちが共に作り上げる学習の一つです。

指導にあたった算数担当や担任の先生は、事前に相談をして「予測→実測→検証」という学習構造を設計していました。自ら問いを立て、仲間と共有しながら歩き、振り返りで自分の予想とのズレに気付くプロセスは、「探究的な学び」の流れそのものです。帰校後の振り返りでは、「走るよりも歩く方が遠くに感じる」「思った以上に長くて、時間が掛かった」と、思考を言語化しながら学びを深めていました。

この一連の学習は、単に算数の知識を体得するだけではありません。他者と協力して情報を集め、予測や根拠をもとに自分の考えを伝え直す。「情報活用能力」(他者と対話し、考えを調整する態度)の育成にもつながっています。数値が「自分の足で歩いたリアルな感覚」に変わることで、1000mが「意味ある長さ」として心に刻まれていく。それが、こうした体験的な算数の大きな価値です。



そんなある日、私の家の冷蔵庫が突然故障してしまいました。せっかく釣りに上げた魚やイカ、野菜も保存ができず、慌てるばかり。けれど、その時ふと「昔の人は電気も冷蔵庫もない時代、どうやって食材を保存していたのだろう?」という素朴な疑問が浮かびました。調べてみると、風通しの良い石室(氷室)や、塩漬け・干物といった保存の知恵、夜間の冷気を活かす工夫など、生活に根差した知恵がたくさん見つかりました…。湿度の高い三宅島での冷蔵庫問題を解決するための私の行動としては、同じ住宅の方から使用していない冷蔵庫をお借りするという方法に落ち着きました…。周りの方々に支えられて生きていることを実感しました。一方、「やってみる!」という行動まで私はたどり着かず、あらためて子供たちの探究心と行動力に脱帽しているところです。子供たちには、かないません。

3年生の1000mの学習は、自分で予想し、自分の足で確かめ、自分の考えを言葉にする。そんな「自己決定力」を育てる学びでした。教育心理学の「自己決定理論」によれば、こうした「自分で選び、やりきる経験」が、内発的な学習動機付けを高め、より深い理解へとつながるとされています。

日常の「困った」「ふとした疑問」を出発点にした学びこそ、「生きる力」につながる大切な一歩です。これからも、教科の枠を超えた「本物の学び」を、大切にしていきたいと思います。今回、1000mの距離を歩く中で、「学びの足あと」を一つ一つ積み重ねました。

小さな一歩が、やがて大きな力となり、未来を切り拓く力になります。

まさに、「千里の道も一歩から」